

海外技術協力 「台湾固有生物研究保護センター」との交流

土木研究所 自然共生研究センター 交流研究員 松間 充^{※)}

1. はじめに

平成14年12月に台湾の行政院農業委員会固有生物研究保護センターが主催するシンポジウムにおいて、日本の多自然型川づくりや河川行政に関して発表する機会があったのでここに報告する。

台湾は島の中央を北東の先端から南西端にかけて山脈が連なっており、それが島の河川の主要な分水嶺となっている。そのため大部分の河川は東西どちらかの方向に流れ、流路長は短く勾配が急であるという特徴を持っている。

今回シンポジウムが開催された固有生物研究保護センターは台湾固有の生物や自然環境に関して調査研究し、保全活動を行っている機関であり、台湾中部の南投県集集という町にある。因みに集集は1999年の台湾大地震の震源地であり、現在も当時の傷跡を残している箇所も所々見られた。



写真-1 武昌宮（震災のメモリアルとして保存）

2. シンポジウム

近年、台湾の河川においても自然環境に配慮した工法が求められており、今回のシンポジウムは「台湾における近自然工法の研究」がテーマであった。そこで、日本の例として、

- ① 多自然型川づくり
- ② 日本の河川環境管理
- ③ 河川水辺の国勢調査

に関する発表を行った。

①多自然型川づくり

日本で多自然型川づくりの取り組みがはじまった歴史的背景および多自然型川づくりの考え方、事例紹介について発表した。

②日本の河川環境管理

日本における河川環境管理施策の動向について過去から現在までをまとめ、今後の方向性として市民団体との連携の必要性等について発表した。

③河川水辺の国勢調査

河川水辺の国勢調査について背景や方法などの基本的な概要から、最近のデータの電子化・情報公開の流れなどについて発表した。



写真-2 シンポジウム会場

今回のシンポジウムで興味深かったのは、主催者は固有生物研究保護センターという生物を専門とする機関であるが、河川技術者という工学専門の人たちも多数参加していたことである。現在では土木技術者と生態学者が共同で活動することは日本や欧米では当然のこととなっているが、台湾などでもそのような動きが活発になっているようである。

発表への反応として、自然環境に配慮した工法をとる場合の技術的な質問が多かったが、いくつかの日本における事例を示しながら、河川毎の特徴を踏まえてどの手法が最良であるかを判断することが大切であるという説明を行った。



写真－3 河川の様子

3. 台湾の中小河川

シンポジウムの合間に、現地の中小河川を見学する機会があった。

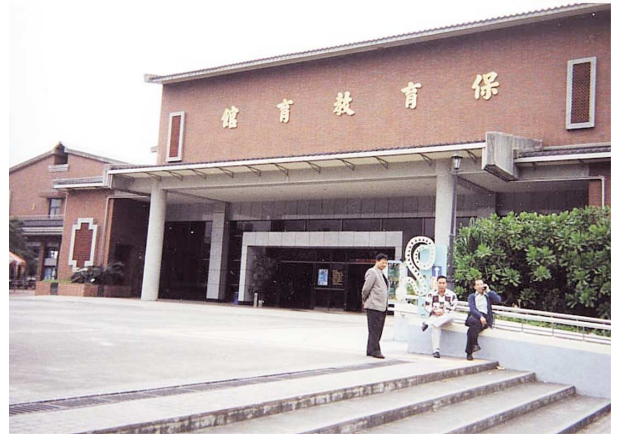
見学した河川はどれも土砂の堆積量が多い印象を受けた。上流には、出水で橋脚の基礎部分が削られ、通行止めになっている橋もみられ、土砂の流出の激しさを感じさせた。

また、台湾はまだ下水道の普及率が低く、場所によっては悪臭のする河川もあった。台湾で近自然工法を行う場合は、単に河道計画だけではなく、下水道整備などトータルな面で検討していくことの必要性を感じた。

4. 保全教育館

シンポジウムの会場となった台湾では、一般の人々に環境保全に関する教育を施すことを目的として、保全教育館という施設が設立されている。

館内には台湾の生態系や台湾固有の動植物に関する展示があり、同時に台湾の文化や人と自然との関わりについて示すことで、自然保護の大切さについて考えられるようになっていた。また、館内には「解説教育組」という専門知識を有する説明員が配備されていた。



写真－4 保全教育館

保全教育館は展示内容や人員の配置という点で、非常に良くまとまっており、見学の子供達も多く見られた。

5. おわりに

日本で多自然型川づくりの取り組みがはじまって十年以上が経過し、成功例、失敗例多くの事例が見られるようになった。その間、台湾あるいは韓国といった周辺の国々でも、環境に配慮した工法への注目が高まってきている。日本としては、技術や成功例はもちろんのこと、過去の反省点なども紹介し、それらの国々で同様の失敗が生じないように努めることも大切である。

台湾の人々からは、日本の良いところを見習って自国でも河川をすばらしいものにした、という貪欲な姿勢が伝わってきた。一方、日本でも河川環境のメカニズムの研究や、それを踏まえた自然再生への取り組みなど、課題は尽きない。今回の交流を通して、河川環境をよりよくするために一層の努力をしていかなければならない、という思いを強くした。